



日 時	2026年4月2日(木) 15時50分～16時45分
場 所	板橋区立若木小学校 校長室→体育館
出席者	10名(【地域委員】7名、【行政委員】3名)
欠席者	3名
傍聴人	【あいキッズ】1名、【若木小学校教職員】26名

### 議事内容

1 校長が委員を委嘱し、CS委員らが委員長を互選で選出した。(校長室)

(欠席CS委員については、事前に校長が委員長選出に関する意向を確認済み)

2 委員長が副委員長を指名し、あわせてオブザーバーの臨席を承認した。

また委員長からは、後述4の中で、児童の安心・安全を最優先事項とする考えを示した。さらに、児童の学力に関わる家庭学習についても言及し、昨年度の保護者アンケートの結果をもとに分析を行い、各委員の意見を踏まえて取りまとめた内容について、資料に基づき説明した。あわせて、これらの内容および方向性は、今後の若木小学校の取組の指針となるものであり、教職員に対しては、それぞれの専門性を発揮しながら推進していくことへの期待を示した。なお、本CS委員会で提示した内容のうち、分析の詳細については、専門的かつ多岐にわたるため、本CS便りでは紙面の制約等も踏まえ掲載を控え、保護者および学校に向けた提言を中心に紹介する旨の説明があった(詳細は後述「分析結果をもとにしたCS委員会からのメッセージ」参照)。

3 校長が令和8年度の学校経営方針について資料をもとに説明した。

校長が教職員の組織及び経営方針について説明し、教員の異動状況等を報告した。

4 若木小学校教職員、CS委員ならびにオブザーバーがそれぞれ自己紹介を行った。

#### <教職員>

今年度は、各学年の担任をはじめ、多様な経験をもつ教職員が着任・配置された。低学年では、これまでの経験を生かしつつ初めて低学年を担当する教員もいるが、新たな視点を取り入れながら、子ども一人一人に丁寧に寄り添う指導を行っていく意欲が示された。中・高学年では、学年主任や担当教科の役割を担いながら、学校全体を見通した指導や、子どもたちの良さを伸ばす教育を推進していく姿勢が示された。

また、異動や新規採用の教職員からは、これまでの勤務校での経験を生かしつつ、地域や学校の特色を理解しながら教育活動を進めていく決意が述べられた。専科教員や養護教諭、栄養教諭、新人育成担当教員などからも、それぞれの専門性を生かし、子どもたちの成長や安心・安全な学校生活を支えていく意欲が示された。

さらに、多くの教職員が、CS(コミュニティ・スクール)との連携の重要性に触れ、地域や保護者とともに学校づくりを進めていきたいという思いを述べた。学校全体として、これまでの取組を大切に継承しつつ、新たな工夫や改善を加えながら、より良い教育活動の実現を目指していく方針が語られた。

#### <CS委員>

ある委員は、小中連携を主なテーマとして取り組んでおり、小学校から中学校への円滑な接続を推進していきたいと述べた。また、町会役員や青少年健全育成地区委員として、盆踊りやキャンプ、スポーツ行事など地域活動にも関わっており、学校と連携しながら地域全体が円滑に機能するよう努めていく考えを示した。CS委員は学校への応援団であるとの認識のもと、学校を支えていきたいという意欲を語った。

別の委員は、3年目の参加となり、これまでの経験を踏まえて学校や教職員との関係にも慣れてきたと述べた。昨年度は中学校の部活動地域移行に伴い、野球部の見守り活動に長時間従事した経験を紹介したうえで、今年度はCS活動に専念し、授業見学などにも積極的に関わりたいとした。また、地域行事への参加については教職員の負担に配慮しつつ連携していきたいとの考えを示した。

地域コーディネーターの委員は、コーディネーター業務に加え、スマイルルームや給食補助、小一サポーターなど複数の役割を担っていることを述べ、日常的に学校に関わる立場として引き続き支援していく意向を示した。

放課後活動に関わるオブザーバーは、放課後の時間が翌日の学校生活やその後の生活につながる重要な時間であるとの認識のもと、継続して子どもたちの成長を支える活動に取り組んでいく考えを述べた。

地域センター所長の委員は、異動に伴い新たに地域と学校に関わる立場となったことを説明し、町会や学校、青少年健全育成の活動に貢献していきたいと述べた。また、自身の子どもの入学経験にも触れ、学校への思いをもちながら協力していく意欲を示した。

主任児童委員の委員は、これまでの子育てや学校との関わりを背景に役職を引き受けた経緯を述べ、若木小学校の子どもたちの支えとなるよう努めていきたいとした。

長年地域や学校に関わってきた委員は、PTA 会長や教育委員の経験を踏まえ、現在は CS 委員として活動していることを紹介した。スマイルルームでの継続的な関わりを通して、担任や保健室と連携することで子どもたちの変化を実感していると述べ、引き続き支援していく考えを示した。また、給食補助などにも協力する意向を述べた。

最後に、オンライン参加の委員は、これまで副会長として関わってきた経験を踏まえ、今年度は PTA 会長としての役割を担うこととなったと述べた。新たな立場で責任を果たしつつ、委員会運営に貢献していく決意を示した。

5 副校長が謝辞を行った。

## CS 委員会における表彰について

昨年度、CS 委員会より本校における児童のタイピング能力育成の取組として、「キーボー島」を提案し、導入した(令和 7 年度第 3 回若木小 CS だより、ほか第 4 回、第 6 回参照)。その結果、すぐれた成績を収めた児童を対象に表彰を実施することができた。今年度も同様の取組を実施する。端末の有効活用の観点からも、授業の合間や家庭学習で活用し、児童が積極的に練習に取り組めるようご配慮いただきたい。



左図…代表児童に対する表彰 右図…該当児童(各クラスで担任より表彰)

## 分析結果をもとにした CS 委員会からのメッセージ

保護者の皆さま・学校の先生方へ  
いわゆる宿題の進め方について

### コミュニティ・スクール委員会からの提案

コミュニティ・スクール委員会では、保護者アンケートの結果をもとに、これからの宿題のあり方について分析を行いました。その中で見えてきたのは、子どもたちにとって合う学び方は一人一人少しずつ異なるということです。今回の結果では、家庭で学ぶ習慣が身に付いている子ほど、家庭で学ぶ時間も長い傾向が見られました。また、保護者が家庭での学習を大切だと考えているほど、子どもの学習時間も長い傾向が見られました。このことから、子どもの学力を伸ばしていくうえでは、単に

宿題の量を増やすことだけではなく、無理なく続けられる学習習慣を育てることが大切だと考えられます。

一方で、宿題の受け止め方には違いがありました。「今の一律の宿題は子どもに合っている」と感じている保護者ほど、一律の宿題を選びやすく、逆に「少し合っていないかもしれない」と感じている保護者ほど、家庭で子どもと決める課題を選びやすいという傾向が見られました。さらに、家庭ごとに選べる方法に賛成する保護者ほど、実際にも家庭で決める課題を選びやすいことも分かりました。

この結果を踏まえると、委員会としては、すべての子どもに全く同じ宿題を続けることだけが望ましいとは言い切れないと考えています。もちろん、一律の宿題には、学習の習慣を作りやすい、基礎的な内容をそろえやすいといった役割があります。しかしその一方で、学年が上がるにつれて学習内容や個人差が広がることを考えると、子どもに合った学び方を少しずつ広げていくことも必要ではないかと考えます。

## 委員会として大切にしたい考え方

委員会としては、「一律の宿題をなくすかどうか」という議論よりも、「子どもに合った学び方をどう広げていくか」という視点を大切にしたいと考えています。

保護者の皆さまにとっては、これまで宿題といえば学校から一律に出されるもの、という受け止めが一般的だったと思います。また、学校の先生方にとっても、これまでのやり方を大きく変えることには不安や負担が伴います。そのため、急に全面的な変更を求めるのではなく、無理のない形で少しずつ進めていくことが現実的であり、子どもたちのためにも望ましいと考えます。

## 保護者の皆さまへのメッセージ

委員会として、保護者の皆さまにお伝えしたいのは、「一律がよいか、自由がよいか」で考えるのではなく、「今の宿題がわが子に合っているか」で考えていただきたいということです。家庭で決める課題と聞くと、特別な教材を用意したり、難しいことを考えたりしなければならないように感じるかもしれませんが、そうではありません。

たとえば、

- 漢字の練習
- 音読
- 計算の復習
- 教科書の読み直し
- 間違えた問題のやり直し
- 苦手なところの見直し

など、学校で学んだ内容をもとに、その子に合った形で学習を進めることも立派な家庭学習です。

大切なのは、特別なことをすることではなく、子どもが無理なく続けられることです。

また、家庭で決める課題に不安がある場合には、必要に応じて一律の宿題に戻れる安心感をもてるようにすることも大切です。一度試してみて、難しければ戻る。そして、またできそうであれば再び挑戦する。そのような柔軟さがあれば、初めてのご家庭でも取り組みやすくなると思います。

## 学校の先生方へのメッセージ

委員会として、学校の先生方をお願いしたいのは、子どもに合った学び方を広げていく方向性を大切にしつつ、先生方の負担が過度に増えない方法で進めることです。特に、日によって「今日は一律、今日は自主」といった形で、家庭ごとに細かく管理しなければならない方法は、現実的には運用が難しいと考えます。そのため、日々の細かな出し分けではなく、学年や一定期間ごとのまとまりの中で、少しずつ家庭で決める課題の幅を広げていく形が望ましいと考えます。

たとえば、

- 低学年では一律の宿題を中心にしながら、家庭で決める課題にも少しずつ触れる
- 学年が上がるにつれて、家庭で決める課題に取り組む機会を増やしていく
- 高学年では、子どもに合った学習を家庭で考えやすい形へ広げていく

といったように、学校全体として段階的に選択の幅を広げていくことが考えられます。

また、宿題の示し方としては、毎日細かく出し分けるよりも、一週間分をまとめて示す、いくつかの型を用意して回していくといった方法の方が、先生方にとっても保護者にとっても分かりやすく、無理が少ないと考えます。

## 本校の子どもたちの実態から見えること

今回の調査結果を見ると、本校では家庭学習そのものを重視していく必要があることが改めて確認されました。本校において学力向上は重要な課題であり、そのためには、家庭学習を軽視することはできません。

加えて、本校児童の家庭学習時間を学年別にみると、学年が上がるにつれて平均値は上昇している一方で、ばらつきも大きくなることが分かります。今回の調査では、60分の次の選択肢を「120分以上」として尋ねているため、集計上は120として扱われています。したがって、以下の数値における上限は、厳密には「120分」ではなく、「120分以上の層を含む値」であることに留意が必要です。そのうえで見ると、1年生は最小10分、最大は120分以上の層を含み、平均32.9分、分散457.1、2年生は最小10分、最大60分、平均32.7分、分散186.1、3年生は最小10分、最大は120分以上の層を含み、平均41.3分、分散450.0、4年生は最小10分、最大は120分以上の層を含み、平均46.7分、分散951.1、5年生は最小0分、最大は120分以上の層を含み、平均47.8分、分散1228.1、6年生は最小0分、最大は120分以上の層を含み、平均52.5分、分散1350.7でした。つまり、学年が上がるほど家庭学習時間は長くなる傾向がある一方で、同じ学年の中でも学習時間の開きが大きく、同じ学年だから同じ時間でよい、という見方では十分でないことが分かります。

小学生の家庭学習の目安として、しばしば「学年×10分」という言い方が用いられます。しかし、文部科学省<sup>[1]</sup>の「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」では、小学校段階では「学年×10分」、中学校段階では「学年+1時間」を目安にしている学校が全国的に多いと紹介される一方で、そのままでは小6から中1で学習時間が大きく伸びうるため、「無理なく家庭学習の習慣を付けていく観点から」「よりなだらかに家庭学習の目安となる時間を長くしていく工夫も考えられる」と示されています。つまり、文科省自身も「学年×10分」を全国一律の最適基準として定めているのではなく、学校現場で広く用いられている目安として扱いながら、子どもの実態に応じた工夫の必要性を示しています。

こうしたことを踏まえると、委員会として強調したいのは、本校において家庭学習は学力向上のために欠かせないということです。ただし、その際に必要なのは、「学年×10分」のような分かりやすいが、科学的根拠のある絶対基準とは言えない目安をそのまま当てはめることではありません。むしろ文科省の資料が示しているのは、家庭学習の重要性とともに、子どもの実態に応じて目安や課題を工夫する必要性です。大切なのは、一人ひとりの子どもの学習状況、理解の程度、つまずき、得意・不得意、生活の実態を丁寧に見取り、その子に合った目標や課題を処方していくことです。すなわち、家庭学習を重視するからこそ、一律ではなく、子どもに応じた支え方が求められるのです。

## 今後に向けた委員会としての提案

以上を踏まえ、コミュニティ・スクール委員会としては、次のように提案します。

- ・子どもの学力向上のためには、宿題の量だけでなく、続けやすい学習習慣づくりを重視すること
- ・一律の宿題だけを絶対的な前提とするのではなく、家庭で決める課題を少しずつ広げていく方向を大切にすること
- ・ただし、急な全面移行ではなく、必要に応じて一律の宿題に戻ることもできる安心感をもたせること
- ・先生方の管理負担が大きくなりすぎないように、日替わりの複雑な運用ではなく、学年段階や一定期間ごとのまとまりの中で進めること
- ・すでに始まっている家庭での実践を生かしながら、学校全体として少しずつ広げていくこと
- ・分かりやすい一律目安に頼るのではなく、一人ひとりの子どもに合った目標や課題を考えること
- ・学年が上がるにつれては、基礎的な内容（例：漢字・計算・読書等）を一定程度大切にしつつも、子どもが「面白い」「もっと知りたい」と感じた分野を伸ばす学習も尊重し、学ぶこと自体への興味・関心を育てる視点を取り入れていくこと
- ・家庭ごとの学習環境や支援の差により、学習状況に一定の開きが生じる可能性があることを踏まえつつも、そのすべてを学校のみで解決しようとするのではなく、行政による学習支援事業や教育支援センター、放課後の居場所事業等の公的サービスと適切に連携しながら、多面的に子どもを支える視点をもつこと
- ・特に支援を必要とする児童に対しては、学習指導補助員の配置や外部人材の活用、地域・大学等との連携など、学校外も含めた支援の充実が現実的であることを踏まえ、無理のない範囲で活用を検討していくこと
- ・子ども同士の違いを前提としながらも、互いの学び方を認め合い、学び合える関係づくり（集団の中での学び）を大切にすること

## おわりに

今回のアンケートから見えてきたのは、どの子にもまったく同じやり方が合うとは限らないということです。一律の宿題が合う子もいますし、家庭で子どもと決める課題の方が力を発揮しやすい子どももいます。しかし、そのことは、家庭学習の重要性が低いという意味ではありません。むしろ、本校では学力向上が重要な課題であるからこそ、家庭学習そのものはこれまで以上に大切にしなければならないと委員会では考えています。

本校では、校長が2024年の着任時に、教職員に対して次の4つの「リミッター」を打破することを学校経営方針として示しました。

それは、

- 「前例踏襲」—いいじゃないか今のままで
  - 「思考停止」—なにがおかしい今のままで
  - 「固定概念」—決まっていることだ今のままで
  - 「自己制止」—これ以上自分には無理だ今のままで
- というものです。

委員会では、こうした考え方は、教職員だけでなく、子どもを取り巻くすべての大人、そして子どもたち自身にも大切な視点であると考えています。宿題のあり方についても、「これまでずっと一律だったから」「学年×10分が分かりやすいから」という理由だけで考えを止めるのではなく、今の子どもたちにとって何が必要か、どのような支え方が学力向上につながるかを改めて考えていくことが必要です。

もちろん、急に大きく変えるのではなく、不安があれば戻ることもできるようにしながら、無理のない形で進めていくことが大切です。そのうえで、前例や思い込みにとらわれすぎず、家庭学習をしっかり位置付けながらも、一人ひとりに合った学び方を少しずつ広げていくことが、これからの学びをよりよいものにしていくと考えます。

コミュニティ・スクール委員会としても、保護者の皆さま、学校の先生方の双方に寄り添いながら、子どもたちにとってよりよい学びの形を、固定化された見方にとらわれず、一緒に考えていきたいと思えます。

引用 [1] 文部科学省(2016) "小中一貫した教育課程の 編成・実施に関する手引"  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/08/29/1369749\\_1.pdf?utm\\_source=chatgpt.com](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/08/29/1369749_1.pdf?utm_source=chatgpt.com)

### CS 委員会年間予定について

年間予定を以下のとおりである。

- 第1回 令和8年04月02日(木)15:50～16:45
- 第2回 令和8年05月16日(土)13:30～15:00 ※午前土曜授業
- 第3回 令和8年09月17日(木)15:15～16:45 ※前期評価について
- 第4回 令和8年10月14日(水)※学びのエリア合同 会場:中台小(時間調整中)
- 第5回 令和8年11月28日(土) 13:30～15:00 ※15:15～16:45 ※学校評価 ※AM 学習発表会
- 第6回 令和9年01月23日(土) 13:30～15:00 ※次年度の経営方針について※AM 土曜授業

配布資料	【学校側配布資料】		
	(1) 令和8年度 第1回若木小コミュニティ・スクール委員会 次第 (2) 令和8年度 板橋区立若木小学校学校経営方針 (3) 令和8年度 板橋区立若木小学校 教職員組織4月8日版 (4) 令和7年度 コミュニティ・スクール委員会 会計報告 (5) 令和7年度 板橋区立学校経営計画・自己評価表・学校関係者評価表 (6) 保護者に対する意向調査分析結果について 4月2日版 CS委員会		
作成者	CS委員長	確認者	校長